

【資料紹介】

磐田市上神増 E 2 号墳出土三葉環頭大刀について

大谷 宏治・大森 信宏

要旨 磐田市上神増 E 2 号墳から出土した鉄製三葉環頭柄頭について報告作成時の X 線写真で無象嵌と判断し報告した。報告書刊行後、複数の研究者から掲載された X 線写真を観察すると、内外縁に象嵌のように見える線があるが象嵌ではないかとの指摘があり、再確認の要望があった。このため X 線撮影し象嵌の有無について再確認を行ったところ、象嵌は施されていないことを確認した。

キーワード：上神増 E 2 号墳 三葉環頭大刀 X 線写真 象嵌 古墳時代後期

1 はじめに

(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所(以下、静岡県埋蔵文化財センター)が発掘調査を実施した磐田市上神増 E 2 号墳から鉄製三葉環頭大刀(図 1)が出土し、2010 年に報告書を刊行した(静岡県埋蔵文化財センター 2010)。報告書刊行から 6 年を経過した 2016 年 3 月に古墳時代の刀剣類の研究の方から、報告書作成担当の大谷(当時静岡県埋蔵文化財センター、以下センター)に、①報告書に掲載された三葉環頭大刀柄頭の X 線写真を観察すると、環の縁や三葉部分に象嵌が施されている可能性がある、②象嵌があった場合、大刀の位置づけだけではなく古墳の評価について再検討する必要がある、ことから象嵌の有無について再度確認していただけないかの要請があった。そこで大谷が実物を再度確認したものの表面は錆化しているため象嵌は観察できず、また報告書作成時の X 線写真フィルムを確認したが、象嵌の有無は判別できなかった。そこで X 線で再撮影を行い、象嵌の有無を確認する必要があると感じた。ただし、要請のあった 2016 年 3 月はセンター移転の準備期間に当たっ

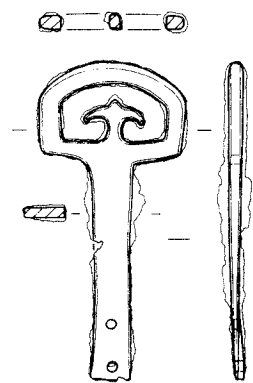


図 1 上神増 E 2 号墳出土
三葉環頭大刀柄頭(1:3)

ており撮影を実施するのは困難であったこと、また X 線装置が更新される予定になっていたため、センター移転終了後、X 線装置が設置された段階で大森が再撮影を行うこととし、その撮影写真で象嵌の有無を判断することとした。

(大谷・大森)

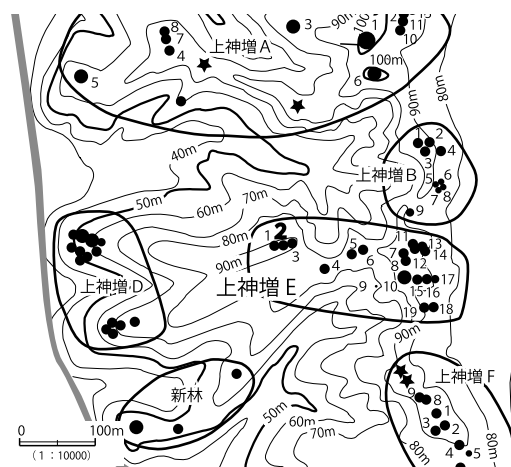


図 2 上神増 E 2 号墳の位置

2 上神増 E 2 号墳の概要

三葉環頭柄頭の X 線再撮影結果の前に、それが出土した上神増 E 2 号墳について簡単にみておきたい。

磐田市上神増 E 2 号墳(以下、E 2 号墳)は、磐田市上神増に所在し、磐田原台地と赤石山系の南に向かって延びる丘陵との間にある、いわゆる「合代島丘陵」に築造された上神増 E 古墳群のうちの 1 基であり、天竜川へ向かって延びる尾根上に築造されている(図 2)。E 2 号墳は、西側(尾根の先端側)に木棺直葬墳である E 1 号墳(古墳時代中期後葉～後期前半、5 世紀後半～6 世紀前半)、東側に横穴式木室墳である E 3 号墳(鈴木敏則氏編年遠江Ⅲ期中葉～後葉、6 世紀後半～末、鈴木 2001)に隣接する。

E 2 号墳(図 3)は、12.4 m のやや不整形な円墳で、川原石を用いた全長 3.8 m の無袖形横穴式石室を埋葬施設とする。出土遺物は、石室内から今回報告する鉄製三葉環頭大刀柄頭をはじめ、大刀 2 点、小刀 1 点、刀子 2 点、鉄鏃 5 点以上が出土した。土器は石室内か



図3 上神増E2号墳の概要

ら出土せず、須恵器15点（杯蓋6、杯身5、短頸壺1、平瓶1、長頸壺？1片、埴？1片）が墓道から出土した。

E2号墳の築造時期は出土した遺物相から遠江Ⅲ期中葉、陶邑田辺編年TK43型式期に該当し、遠江Ⅲ期後葉（TK209型式期）、遠江Ⅲ期末葉～Ⅳ期前半（TK217型式期）に追葬が行われた可能性が高い（静岡県埋文研2010）。（大谷）

3 上神増E2号墳の三葉環頭大刀について

E2号墳の三葉環頭大刀柄頭は鉄製で、金銅装・銀

装などの装飾は施されていない（図1）。象嵌の有無については後述する。柄頭は蒲鉾形（上円下方形、圭頭形）の環内に三葉文を表現する。柄頭茎は柄頭と一体造りで長い。茎を含めた残存長は12.6cm、環長4.0cm、環幅5.8cm、厚さ6mm、茎残存長8.6cm、茎幅1.4cm、厚さ4mmである。茎下部に目釘孔が2孔穿たれる。刀身2点は柄頭と離れた位置から出土しているためどちらの刀身に伴うか不明である。また、別の大刀に付属したもので刀身が副葬後、持ち出された（失われた）可能性を排除できない。（大谷）

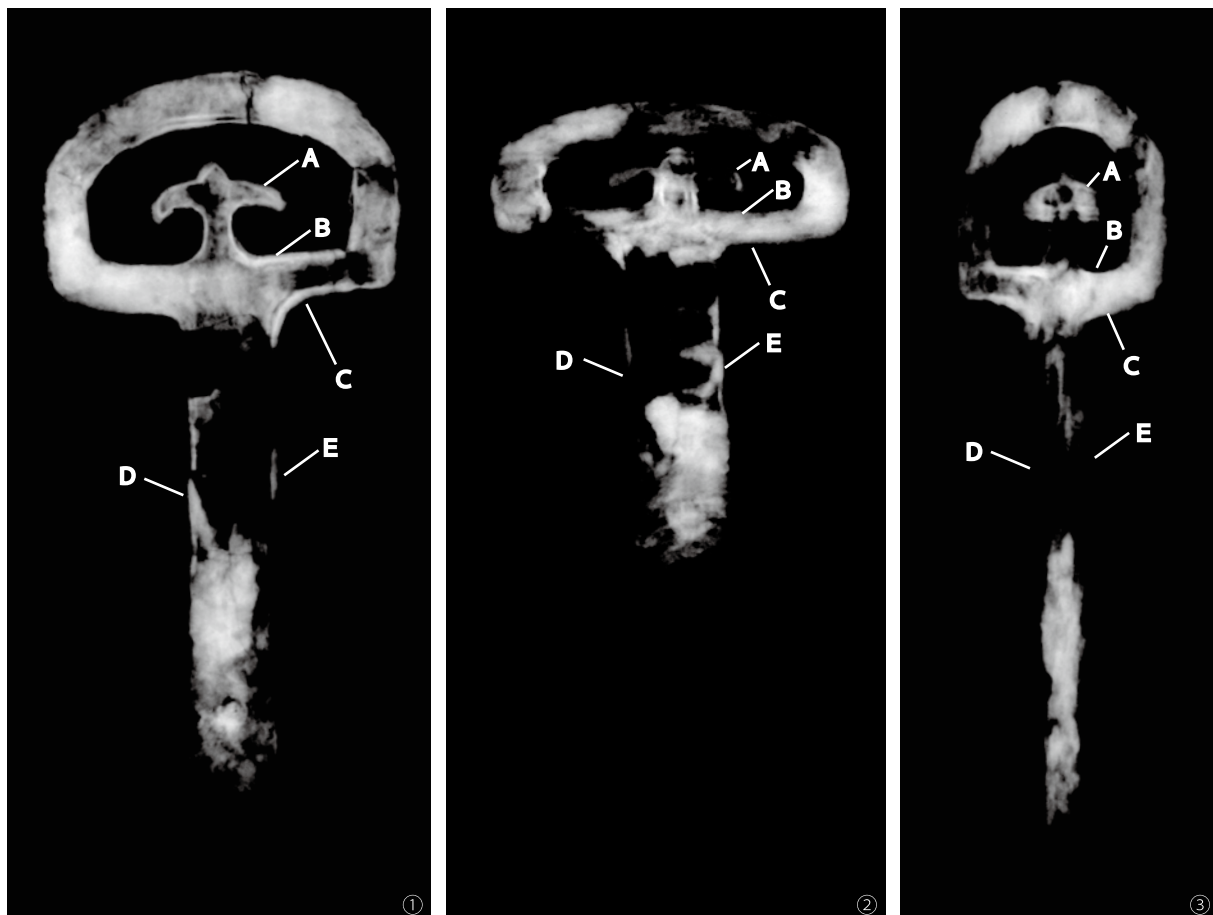


写真1 上神増E 2号墳出土三葉環頭大刀柄頭X線写真

4 上神増E 2号墳出土三葉環頭大刀柄頭の X線撮影の結果について

(1) 撮影機材と撮影の方法

今回撮影に使用した機材は、X線装置がYXLON製MG165/4.5（最大管電圧160kV）、受像器はRF製デジタル受像器NAOMI NX-02Sである。撮影の設定は、被写体と管球の距離100cm、管電圧100kV、管電流1.5mA、X線照射時間2秒である。（大森）

(2) 象嵌の有無の判別

報告書（静岡県埋文研2010）のX線写真において、環の内縁・外縁、三葉文の外縁に象嵌が施されている可能性が指摘された（写真1-①のA・B・C）。

今回の撮影では、報告書と同じ正面（写真1-①）と報告書には掲載しなかった（撮影していなかった）斜め2方向（写真1-②・③）からX線撮影し、詳細に観察したが、正面のX線写真で線状にみえるものも（写真1-①のA/B/C）、斜め方向から撮影した2写真（②・③）では同一個所（A/B/C）に象嵌らしい線は確認することができない。また、通常象嵌が

施されることのない茎にもA/B/Cと同じように見える箇所があり、この部分（写真1-D/E）も写真②・③では確認できない。

X線透過撮影では、X線を物体に透過させた際の材質や密度の違いがX線吸収の差となって結像する。したがって鉄地に金や銀で象嵌が施されていれば、金や銀は鉄に比べてはるかにX線が吸収される（透過しない）ため、はっきりと象嵌が観察される。また、象嵌は線として施されているため、象嵌のX線透過像は、ある一定方向からだけではなく、他の方向からも線として写る。今回及び報告書所収の写真では、正面から撮影したものには線状のラインが見えるが、撮影方向を変えると線らしきものは見えなくなっている。

したがって、象嵌が行われた可能性があるとの指摘を受けた三葉文や環の内縁・外縁で象嵌のように見えた部分は柄頭の本来の外形ラインで、その部分が濃く写っているため象嵌のように見えている可能性が高く、象嵌は施されていないと判断した。（大谷・大森）

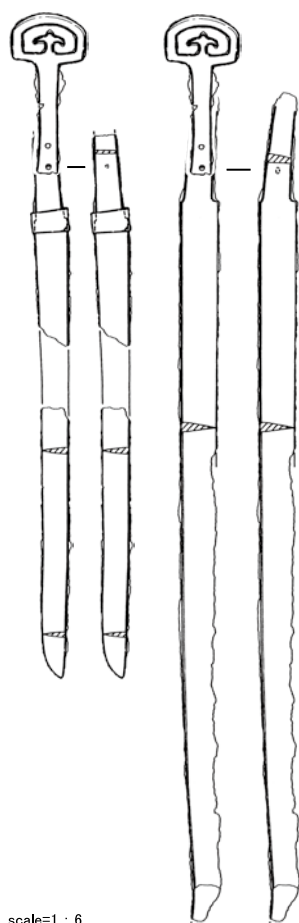


図4 上神増E2号墳出土三葉環頭
大刀柄頭と刀身の関係(1:6)

とや、柄頭茎が長く直接刀身茎と装着される点は韓半島でみられる技法であることなど、E2号墳の築造時期の日本列島ではあまり確認されない特徴であることがわかった。

三葉環頭大刀は、日本列島では単鳳、双鳳環頭大刀が環頭大刀の主体であるなかで、数は少ないものの、日本列島43例、韓半島28例、総数71例出土している(大谷2010)。三葉環頭大刀は柄頭の外形で分類されており、円形環と蒲鉾形環の2種類がある。韓半島では蒲鉾形は新羅地域で主に出土し、円環形は主に百済・伽耶地域で出土している。日本列島では円形が多く、蒲鉾形は7例のみと少ない。また大部分が金銅装であるが、E2号墳のように鉄製のものが若干存在する。齊藤大輔氏のご教授によれば、鉄製であっても日本列島で生産された可能性は低く、「舶載品ラッシュ」(内山2012)とされる時期に三累環頭大刀などとともにもたらされた可能性が高いとのことであり、同様の経緯により合代島丘陵の古墳群を経営した集団が入手した可能性が高いと考える。

また、合代島丘陵の古墳群では、「合代島古墳」から三累環頭大刀が出土している。この装飾付大刀も新羅

5 三葉環頭大刀 柄頭について

今回の再撮影により、E2号墳の三葉柄頭には象嵌が施されていないことを再確認できた。これによって、E2号墳の柄頭が鉄製無象嵌であることが明確になった。改めてE2号墳から出土した大刀に装着された可能性を考慮し、想定復元図を示した(図4)。報告作成時は検討しなかったが、齊藤大輔氏のご教授によれば大刀2点は両関である点がTK43型式期のものとしては日本列島では一般的ではなく、韓半島系の装飾付大刀にみら

れるものであること

系とされるもので、日本から出土するものの生産地はすべて新羅製とする意見と一部倭製を含むとする意見があるが、いずれにしても新羅との関係を示すような遺物である可能性が高い(大谷2010)。

さらに、磐田市神田古墳群(森下ほか2000)では唐代の鏡が出土している。新羅や唐との関係を示唆するような特殊な副葬品を含む古墳が合代島丘陵とその近くの古墳の3基で確認され、上神増D古墳群など横穴式石室が遠江の中では特異な石室でもあることから、合代島丘陵周辺は遠江の中で特異な地域として考えることができ、韓半島など交易や外交に従事した集団がこの地域に住んでいた可能性を想定したい(大谷2010)。

(大谷)

最後に、今回のX線再撮影の結果を今後装飾付大刀の研究にご利用いただければ幸いです。(大谷・大森)

謝辞

X線撮影にあたり田村隆太郎氏にご協力いただいた。三葉環頭大刀の位置づけに関して穴沢咏光氏、齊藤大輔氏にご教示いただいた。明記して深謝します。

参考文献

- 穴沢咏光・馬目順一 1989 「会津大塚山古墳出土の鉄製三葉環頭大刀について」『福島考古』30
- 内山敏行 2012 「装飾付武器・馬具の受容と展開」『馬越長火塚古墳II』豊橋市教育委員会
- 大谷晃二 2006 「龍鳳文環頭大刀研究の覚え書き」『2004年度共同研究成果報告会』大阪府文化財センター
- 大谷宏治 2010 「上神増E2号墳出土の三葉環頭大刀について」(静岡県埋文財2010所収)
- 齊藤大輔 2017 「古墳時代刀剣研究史」『土曜考古』39 土曜考古学会
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010 『合代島丘陵の古墳群』
- 鈴木敏則 2001 「湖西窯古墳時代須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅 補遺・論考編』東海土器研究会
- 持田大輔 2006 「龍鳳文環頭大刀の日本列島内製作開始時期と系譜」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』4号 早稲田大学
- 森下章司・鈴木敏則・鈴木一有 2000 「磐田郡豊岡村神田古墳」『浜松市博物館報』13 浜松市博物館

図の出典

- 図1・4 (静岡県埋文研2010)より引用
- 図2 (静岡県埋文研2010)より改変してトレース
- 図3 (静岡県埋文研2010)より改変して引用
- 写真1 筆者撮影